
ψ不滅なる聖餐杯との契約ψ

妃宮 咲梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ψ不滅なる聖餐杯との契約Ψ

【Nコード】

N65800

【作者名】

妃宮 咲梗

【あらすじ】

通称、便利屋の摩訶不思議な店『El contractor on un c?lizz in mortal』は、昼夜問わず客を受け入れる。相手の注文は何でも引き受け、不可能も可能にする。その注文に見合うだけの同等なる代金、もしくは何かと引き換えに……。幸か不幸かは貴方次第。この作品は「創作五枚会企画作品」として、発表しております。毎回決められた禁則事項とテーマに沿った内容を、約二週間おき更新にて各話ごとに書いていきます。来年三月末まで連載予定

？：沈黙の雨（前書き）

【第一回のお題とテーマ】

- ・禁則事項：主人公の「」による台詞の禁止
- ・テーマ：人形

？：沈黙の雨

少女は歌が大好きだった。

歌こそが彼女、雨音^{あまね}にとって最大の生き甲斐でもあった。

家ではピアノと、外では小鳥の囀りと、そして幼児の頃、両親から貰った少年の陶器人形^{ビスクドール}に、歌って聞かせた。雨音の夢は、歌手になる事。

和服姿をした少年の人形、息吹^{いぶき}は雨音が大好きだった。彼に名前を与えてくれた、彼女の存在が。

> i 1 3 5 0 5 — 4 3 2 <

だが運命は十二歳の雨音から、全ての音を奪った。突然耳が、聞こえなくなったのだ。

以来、雨音は会話は勿論、歌う事も出来なくなった。

何も聞こえない沈黙なる世界に、たった一人置き去りにされた激しい孤独感がいつしか雨音の心を奪ってゆき、明るかった性格も見るに耐えないほど暗くなっていた。

歌が大好きだった雨音に手話は、無意味に思えた。彼女にとって、音は歌でもあったのだ。

音のない世界で生かされる日々が辛くて、泣いてばかりいたがいつしか涙すら流れなくなった。

部屋に閉じこもる毎日。

だが学校には、行かなくてはならない。

聴覚言語障害特別支援学校に転校したが、それは余計に苦痛を酷くした。やがて雨音は同じく口が利けない人形の、息吹だけに依存

するようになった。息吹は嬉しかったが、反面悲しくもあった。彼は雨音の笑顔も、とても大好きだったから。

彼女の笑顔を取り戻したい。彼女を笑わせたい。だが所詮は、人形。何も出来ない。何も、伝えられない。

雨音は人形の息吹を、抱き締める。

あなたが人間ならいいのに。例えば人形でも息衝く存在であつて欲しくて、息吹つて名付けた。でもどうせ音も聴けず歌えないのなら、私が息吹と同じ人形になる方がずっといい。

彼女の思いが息吹に伝わる。

違う。僕が人間になりたいんだ。それなら例えば雨音と同じ様に僕も口が利けなくても、君を動作で笑わせてやれるから。

ふと雨音は彼のガラスの瞳を見詰めて、虚無感を紛らわす様にそつと人形の息吹に、唇を重ねた。

ある日、いつも通り雨音は登校する為に人形の息吹を片手に抱き、通学路を歩いていった。

夜中から降り出した雨は、今朝も降り続けている。もう片方の手で傘を差し、重い足を前進させる。

学校なんか行きたくない。そう思いながら深く俯きノロノロ歩いていると、曲がり角で同年代の少女二人が走つて来て勢い良く、雨音にぶつかった。

雨音はその衝撃で、濡れた道路に倒れる。拍子に、手に持っていた傘と人形が、雨音の手から離れた。

「あ、ゴメン。何か今、音がしたよね」

「ヤダこの子、人形抱いてたんだ。気持ち悪う。早く行こ。学校遅刻しちゃうっ」

そのまま走つて行つた二人の少女の会話は、勿論雨音には聞こえない。彼女は傘を拾うよりも、手から消えた息吹を探す。だが、そこにあつたのはビスクドールである息吹の顔が、半分割れている無残な姿。

雨音は彼の側に座り込むと、雨に濡れながらその破片を丁寧に拾ってゆく。指に鋭い熱を感じて、見ると破片で切った傷口から血が流れていた。その血の雫は、割れてしまった息吹の顔に零れる。

悲しくて、切なくて、虚しくて、雨音は泣きたかった。しかし、涙が出ない。

音のない世界。前髪の毛先から、頬に流れる雨水がその代わりになる。

ふと気付けば、雨音の傍に誰かの足があった。見上げると目前にビニール傘を差した黒髪ショートにオッドアイの若い男が、彼女を傘の下に笑顔で立っていた。

男は古風な西洋創りの店に、雨音を招いた。

看板には、【便利屋】『El contrato con un c?lizz in mortal』とある。

「この人形を、修理しましょう。勿論、タダではありませんが」
壊れた息吹を手にそう言った、男の声が雨音の耳に届いた。思わず我を疑う。

「知っています。あなたの耳が聞こえない事は。今だけ、私の声が聞こえるように操作しました」

無論、それ以外何も聞こえないので雨音は相変わらず、話せない
まだ。

この男の声だけが聞こえる現実が、不思議で仕方なかったが恐怖は感じない。オッドアイの奇妙な男が何者であるのかよりも、雨音は別の事を心配した。それはお金がない事。

登下校のジュース代にと親に渡された、百五十円を取り出すとテーブルに置く。足りない事は分かっている。心ばかりの、雨音の気持だった。

男は壊れた人形、息吹を奥の部屋に持って行き戻って来ると、テーブルの小銭に気付いて微笑む。

「クス。これではとても足りませんね。ですが、不足分はお金でな

くても結構ですよ。その代償に別のものを頂きます」

言うや男は、雨音の前に手を翳す。すると何やら、霧みtainな物が雨音の体から引き出され忽ち男の掌の中に、吸収された。相変わらず怯える事無く、不思議そうにしている雨音。

「確かにあなたの代償、頂戴致しました。ですが、少々修理代にしては代償が余り有るので、サービス致しましょう」

そして男は奥にある部屋を、両手で丁寧に指し示す。見ると、そこにはすっかり修復されたビスクドールの息吹が、微笑みを浮かべ立っていた。

いや。寧ろ人形ではなく、生身の人間の姿になっているではないか。

これにはさすがに雨音は驚愕する。息吹はそんな彼女の元へとゆっくり歩み寄ると、手話で語りかけた。

これでやっと、動作で笑わせてやれる。君の笑顔が、何よりも雨音の事が、好きだから。僕も耳が聞こえず、口も利けないけどね。そんな息吹の気持ち嬉しくて、雨音は人間になった彼を抱き締めた。

「今回、あなたの心にあつた悲愴感と虚無感、それと歌手になる夢を頂きました。ついでに、偶然彼に零れた分の血液も」

思い出し、雨音は指を見ると確かに傷が残っていた。息吹はその手を取り、傷口に優しくキスをする。

後で僕が、手当てするよ。だから笑って雨音。

いつしか溢れ出し、頬に流れる彼女の涙を優しい笑顔を見せながら、息吹はそつと拭った。

相変わらず、音のない世界。もう二度と歌えないけれど、雨音の中の孤独感は嘘の様に消えていた。今はその世界に、人間になった息吹が一緒にいる。

漸く笑顔を取り戻した雨音は、この不可思議な男に深くお辞儀をすると、店を後にした。

息吹に手を、握られながら。

繋いだ彼のその手はとても温かく、そして心地良かった。

？：沈黙の雨（後書き）

二千文字オーバーした、未熟な私を許して下さいm（*T T*）
m

これを教訓に、今後更なる成長と修行を兼ねて頑張ります！！

？…見得ざる者（前書き）

【第一回のお題とテーマ】

- ・禁則事項……登場人物の名前の記載禁止
- ・テーマ……手癖

？：見得ざる者

「パパ。明日学校で分度器とコンパスがいるんだ……」

「ああん！？ そんな物、自分で都合しやがれ！」

騒々しいパチンコの店内で、言い難そうに口にした十歳の息子へ目もくれず、大当たり中の台に向いたまま父親はそう吐き捨てる。

少年はやっぱりかと嘆息吐いて肩を落とすと、父親に背を向けた。忘れた事にしよう。盗むよりはマシだ。先生には叱られるけど、そう思いながら歩き出した時、背後から父親の大声が飛んだ。

「おいガキ！ 今日の分も、しっかり頼むぜ！」

それに息子は愕然とする。少年はパチンコのシステムを知らない。今大当たりしているので、父親はある程度儲かるがそれでも息子には、一銭も金を出さない。それどころか、暴力を振るい息子に窃盗をさせるという、手癖の悪い父親だった。

「ママ……」

少年は一年前にいなくなった母親を想い、涙ながらにパチンコ店を後にした。

やがて、すっかり懷を温めて満足そうに父親がパチンコ店から出て来た時、背後から息子に大声で呼び止められた。彼は不気味な笑顔で振り返る。

「上手く調達した——か！？」

言い終わる頃、目の光景を見て父親はギクリとする。そこには、側にあるスーパ―の前で店員に捕まり泣き叫ぶ、息子の姿があった。助けてパパ！」

すると父親の反応を確認した店員が、険しい表情で少年を引き摺りやって来た。

「親御さんですね」

「うっ！ は、はあ。一体どうしたんで？」

父親は観念した様に、口元を引き攣らせた。

人気のない路地裏で、少年は父親に殴られていた。

「このクソガキ！ てめえが上手くやらねえから、代金取られちまっただろう！ どうしてくれんだ！ ああいう時は、他人の振りをしやがれ！ パパって呼び止めるんじゃねえ！！」

「ごめんなさい！ ごめんな——ギャフツ！！」

散々その体に大の男から全力の蹴りを受けて、少年はついに気を失ったが父親は尚も殴打すべく、拳を振り上げる。瞬間、その手は何者かに掴まれた。そして背後から、澄み切った男の静かな声が届く。

「何かお困りでしたら、この便利屋が何でもご解決して差し上げますよ」

父親は手を振り解きながら相手を見て、差し込む西日で輝くオツドアイの双眸に、ギョツとする。だが、男の美顔に清楚で穏和な様子から父親は弱者者と短絡視すると、途端に傲然となる。

「便利屋だとお！？」

「はい。いかなるご注文でも、全てお引き受け致します」

「へえ。そいつはいいや。だったら今すぐに、この目障りなガキを俺の人生から消してみろ。見る度に不愉快でならねえ」

そう父親は、足元で意識を失っている実子を、爪先で小突く。

「かしこまりました。そのご注文に、相違ありませんね？」

「おう！ 早くしろ！」

オツドアイの男へと、父親は威圧的に我鳴る。

「有難う御座います。お客様との契約は交わされました。では、その対等なる代価を頂戴致します」

それに父親は、敏感に反応する。

「代価だと！？ 金なんざ——」

「いいえ。お金でなくても結構です。その代償となるものであれば、何でも」

父親の剣幕に一切動じる事無く男は冷静沈着に言葉を遮り、悠然とそう切り出す。金は不要と知り、狡猾そうに嘲笑すると恫喝の声を上げた。

「金じゃねえなら、別に何だっていいや。さつさとしろ！」

「かしこまりました。それでは——契約、成立」

同時に男は父親の両眼を真っ直ぐに見据えて、上向きに広げた両掌をグツと握った。

瞬間、父親は突如暗闇に包まれる。

「お、おい！ どうなって——」

言い終わらない内に、父親は路上に倒れ込む。立ち上がろうとするが、支えが利かない。支えがない。それはつまり。

漸く父親は自分が、両腕と両足を肘と膝先から失っている事に気付いた。

「ヒイ！ 何しやがった！」

「あなたのご注文通り、息子さんを視界から消したのです。目障りで見える度に不愉快と仰いましたので、両眼を取り除きました。そして人生から、一人の少年を消すからには相応の代償として、普段から手癖の悪いその手足を代価に頂戴致しました。それでは、この度は当店E l c o n t r a t o c o n u n c ? l i z i n m o r t a l をご利用頂き、真に有難う御座いました」

遠ざかる足音と共に、大きな羽音がその後続く様子だけが、父親の聴覚から受け取れた。

少年が病院のベッドで目を覚ますと、そこにはいなくなったはずの母親が向ける、優しい笑顔があった。

「ママ……？」

「やっと取り戻す事ができた……」

彼女は、夫の暴力で半年入院していた。半年後、息子を迎えに行
ってが父親は利便上会わせなかったのだ。

少年は路上に倒れているところを救急車で病院へ運び込まれた。
母親は警察から連絡を受けて、急いで駆け付けたのだ。側にいた父
親はすっかり錯乱していた為、理性を失っているとの判断で精神病
へと移送された。

「これから、ママと二人で一緒に暮らしましょう」

「ママ！ ママァー！」

少年は喜びに涙を流し、感動の再会に母子はしっかりと抱き締め
合った。

？：孤独なる死（前書き）

【第三回のお題とテーマ】

- ・禁則事項その一……「？」と「！」の使用禁止
- ・禁則事項その二……登場人物の名前の記載禁止
- ・テーマ……退屈

？：孤独なる死

TVでは、マラソン中継されていた。

それを眺めていた老翁は、溜息を吐くと煩わしそうにTVを消した。そしてゆっくりと首を巡らせ室内を見渡すと、炬燵から身を乗り出し少し離れた場所にある新聞に手を伸ばす。

広げて視線を落としたが、五秒も経たぬ内に新聞を放るとまた、今度は深い溜息を吐いた。座っている座椅子の半倒しにした背凭れに全身を委ねると、天井を眺めながら呟く。

「……退屈やなあ……」

彼は身寄りが誰もいない孤独な老人だった。この世に生まれ落ちて、もう八十九年の歳月を生きてきた。

戦争を体験し、一兵として戦地を潜り抜け無事生還を果たした。

生きて必ず戻ると約束して待たせた女と、その後結婚。一姫二太郎の二人の子供を儲けた。

その後成人した子供達もそれぞれ家庭を持ち、今や孫までいる。彼にとっては曾孫になるが、もう三世代四世代となる子孫達も家庭を育み祖父祖母となった、彼の子供達の面倒を見るのに手一杯だ。

十年前に死去した妻の葬式以来、半ばもう忘れ去られた様に誰一人、訪ねて来る事は愚か連絡さえない。

戦後よりすっかり発展を遂げた昨今。

この近代建築物がひしめき合い車は排気ガスを吐きながら渋滞し、人々は時間に追われる如くせかせか歩くこの都会では、八十九歳の老人にとって最早散歩は難儀でしかない。

衰えた足腰で必死に周囲と合わせて歩いているつもりでも、彼よりも若い通行人から邪魔だの遅鈍だのと罵られる。昔と比べて便利になった時代の風は、他人に対してすっかり冷たくなってしまった。

アパートの借家で六畳と四・五畳、台所に風呂とトイレの一室で一人暮らしをしている。ここに暮らし始めて二十年。初めは妻も一緒だった。若い頃に建てたマイホームは、とつくに息子へ譲っている。

気付けば、いつの間にか視線は妻の仏壇へ向いていた。空虚心のまま暫く仏壇を眺めていたが、老人は重い腰を上げると五年前に買ったつきり一度も使う事無く白紙のままの、分厚い日記帳と万年筆を取り出した……。

一年後。

老人は病室のベッドの上にいた。

この一週間前、自分の人生を書き綴った日記帳をこれと言った理由も、そして欠片の期待もないまま出版会社に郵送した。まるで、見えない何かに操られるかの様に自分の意思もないまま、そうしたので。

その帰りに、何もない道で転んでしまい動けなくなっているところを、丁度パトロール中の警察が見つけた病院に運ばれた。

見舞い客が一人も来ない病室のベッドで、老人はボンヤリと天井を眺めていた。まるで最後の使命を果たしたかの様に、倒れて以来認知障害になってしまった彼の口癖は一つ。

「退屈やなあ……」

時間はもうすぐ十七時になろうとしていた。廊下から聞こえてくる配給の準備。微かに鼻孔を擽る夕飯の匂いに、老人は一言本能的に漏らした。

「腹ア——減ったなあ……」

三分後、配給係が彼に夕食を運んできたが、老人は眠るように息を引き取っていた。

半年後。

彼が出版社に送った日記帳の作品が、見事大賞を取りその年の話題作になった。だが著者である老人は、半年前にこの世を去っている。

賞金と売り上げの行方かというと、彼が日記帳の最後に残した言葉にあった。

『救済慈善活動全てに、我が財産を寄付する』

本来彼は寄付する程の財産など、元々持っていなかった。しかしその“財産”は、老人にとっては金銭や土地を指し示す意味では、なかったかも知れない。

もしかしたら日記に書き綴った、自分の人生の経験かも知れないしそれともこれと言った深い意味もない、ただの戯言なのかも知れない。もしくは、それをどう解釈するか相手に委ねたかも知れないが。

結果的にその最後に残された言葉が遺書となり、老人の出版された本の売り上げ等は全て、寄付へと回った。

その本のタイトルは——『退屈』

便利屋、El contrato con un c?liz inmortalにて。夜明け前の店内、接客用のソファで寛ぎながら一人の美女が、本を読んでいた。

淡い桜色の肌に真珠色した長いウェーブの髪。活字に視線を落とす、髪と同じ色をした長い睫毛の下から覗く黄金色の瞳。

彼女は読了すると本を閉じて、無造作に背後へ放り投げながら嘆息と共にぼやいた。

「ホント、退屈な話だったわ。こんな本が話題作だなんて、理解出来ない」

そうしてうんと背伸びすると、ソファの傍らで丸くなって蹲っている相手に言った。

「退屈そうね。あなた」

それは鮮やかな赤毛に黒い斑紋、そして首周りから胸元にかけて濃い深紅のたてがみをした、オッドアイの豹だった。

「ああ。もう夜が明けるわ。次は、あなたの出番よ。——……」

彼女が赤い豹の名を口にしかけた時、朝日が差し込み女はパールがかった翡翠色の横斑をした大鷹へと、姿を変えた。

一方、傍らの赤い豹は入れ替わる様に黒髪をした人間の男に、変わっている。

「この忌々しい呪いから解放されさえすれば、退屈な夜を過ごす事もなくなる……」

紫と青緑の色をしたオッドアイの男は、翡翠色の大鷹になった彼女に言うと、優しく腕の中に抱き締めた。

？：サイレントナイト（前書き）

【第四回のお題とテーマ】

- ・禁則事項……二人称のみで執筆（一人称と三人称の使用禁止）
- ・テーマ……静寂

?:サイレントナイト

——あなたは神を信じますか?——

それとも、無神論者? 或いは、不可知論者?

え? じゃあ僕はどうなんだって?

それは……分からない。

僕には元々、“神”という概念がない。いや、なかったと言っべきかな。

じゃあ哲学的な事はひとまず後にして、これならどうだろう?

君はペットを飼った事はある? それとも現在、飼育中?

僕はね。一度捨てられて保健所に入っていたんだよ。

君には分かるかい? 突然与えられる不安、恐怖がどんなものなのか。

僕が初めて保健所に連れて来られた時、そこがどんな場所なのかさっぱり分からなかったけど、重い鉄ドアを開けられた瞬間飛び込んだ光景は、今でも忘れない。

みんな混乱していた。怯えていたんだ。狂っている犬もいた。みんな理由を知らない。だけど伝わるんだ。言い知れぬ絶望感。全身に渦巻く、違和感。

怖くなって僕も無我夢中で暴れ回ったけど、一番手前の鉄格子の部屋に放り込まれた。鉄格子の間から鼻先を押し付けて、一番奥の部屋を見たらそこにいるみんなは恐ろしい程、大人しかった。

それは諦めと虚無感と、自分達の運命を受け入れきってしまったている哀切感。

次の朝には、彼らは全ていなくなっていた。僕らを監禁している鉄格子の部屋は、左右の壁がスライド式になっていて一日経過する

ごとに、次の部屋へと押しやられ移動する仕組みになっていた。

奥の部屋に近づくに従って、僕は言い知れぬ恐怖で食欲すら失った。そして最奥の部屋の手前まで移動させられた日に、突然僕は外に出されたんだ。

そこには、満面の笑顔をした彼がいた。僕は戸惑ったけど、そのまま彼に引き取られた。運良く僕は、あの空間独特の恐怖から解放されたんだ。喧騒の中漂い、そして最奥の牢獄に澱み集う重苦しい沈黙の威圧から。

だけど僕は悲しい事に、人間不信になっていたんだ。

僕を引き取ってくれた彼にも、懐疑心しか持てずにいた。それでも彼は、少しずつ僕の中の不安を解してくれた。彼は“しょうた 彰太”と名乗った。

今まで僕はずっと人間に飼われていた。気付いた時からそうだった。

そんな飼い主が大好きだったのに、ある日突然いなくなった。僕を保健所に置き去りにして。

だけど彰太に引き取られて、また戻ってきたいつもの日々。ごく当たり前のひととき。飼い犬としての、ペットとしての。

ただ違うのは、以前の飼い主から彰太に変わった事。

当たり前の様にご飯を貰って、散歩に行って、少しずつ馴染んでいく彰太と遊ぶ。以前の飼い主とも同じ様に過ごしてきた、普段と変わらぬ日常が戻ってきたのに。

どうしてかな。そんないつもの毎日に、突然恐怖を覚えたんだ。それは見慣れた当たり前の光景や日々に対する、未知なる不安感。なぜかそれが初めての体験の様に感じて、怖くなった僕はパニックになって道路へ飛び出したんだ。

後で知ったけど、それはジャネブと言うらしい。デジャブの反対。多分、以前突然保健所に置き去りにされたのが原因だと思う。君には経験ある？ 当たり前の慣れ親しんだ日常で、突然襲われる違和感なんだ。

気付くと僕の足元に、彼が倒れていた。血塗れの姿で。彰太は僕に言った。

「良かった……。お前が、死ななくて」

それだけを言い残して、彼は動かなくなった。彰太は僕を守ってくれたんだ。

犬である、僕なんかの為に。人間である彰太が。体を張って車の前に飛び出して、そして死んでしまった。

彼がいなくなってしまった今、僕は彰太に逢いたくて堪らない。その為だったら何だってするよ。だからどうか、僕を彰太に逢わせて下さい――。

――あなたは神を信じますか？――

僕は分からない。

でもね。今なら思うよ。それに近い存在はいるのかも知れないって。君なら何を望む？ 一体何を願うんだろう。

少なくとも僕は彼を望んだ。君がこの物語を読み終わる時、僕はもうこの世にいないだろう。

だって僕は、死んでしまった彰太に逢いたいと、願ったんだから。この、命と引き換えに。

いいんだ。彰太がいなければ僕はきつと死んでた。一度救われた命。二度目はもう充分だよ。彼がいなければ僕はいなかったもの。

だから彼がいらない世界にもう僕はいらない。二度目の保健所は真っ平だよ。あの日あの時、保健所で感じた重苦しい威圧的な沈黙。

でも今は違うよ。心から安らげる――穏やかな静寂。

抜け殻になった僕の肉体を、真珠色の髪をした女の人が優しく撫でてくれている。オッドアイをした赤毛の豹を傍らにして。

「星が――とても綺麗ね。オセ」

夜空を見上げ、オセという名前らしい赤毛の豹に彼女は声をかけてから、続いて僕に尋ねてきた。

「これであなたは本当に幸せなの？」

きつとその君も、同じ事を思っているかもね。

彰太に誘われて天へ昇る僕に向けた、彼女の黄金の瞳からは次々と涙が零れている。泣いてるみたいだ。

「ワン！」

僕は彼らへ頷く様に答えると、大好きな彰太と一緒に夜空へ姿を消した。

？：交われぬ愛（前書き）

- ・禁則事項……会話文の使用禁止
- ・テーマ……憎悪

？：交われぬ愛

「カルラ……」

彼は独り、小さく呟いた。

その正体は、ソロモン七十二柱の魔神の一柱で約三十前後の軍団を率いる、序列五十七番の地獄の大総裁である。

詰まる所の魔族、人間の名称で言う悪魔の種族に入る。

彼等は地獄における爵位を持ち、王・君主・公爵・侯爵・伯爵・騎士・総裁という階級の中では、オセはその最も低い総裁の十一番隊長で下には後、三隊長がいる。

そんな立場であるオセが恋した相手が、カルラだった。

愛しのカルラ――。

二人はいつからかまるで、導かれる様に惹かれ合い恋に落ちた。だがお互いの立場は正に天地の差までに違う。

それはカルラが天の御使いの存在であるからだ。人間の言葉を借りるなら、“天使”に等しい。

彼女はヒンドゥー教に分類される、仏教守護神天竜八部衆もしくは二十八部衆の一の立場であり、三人の最高神の一人ヴィシュヌに仕えていた。

そんな宗派も種族も立場も違う二人は、常時周囲の隙を狙っては密かに逢瀬していた。だが肉交は愚か、口付けすら遂げていない。しかしその日が来るのは近い事を、二人は内心どこかで気付いていた。

今日、彼女を抱こう。そうオセは決めていた。

毎回下界で落ち合う時、先に下界へ降臨した方が相手を呪文で呼び出す様にしていた。その方が周囲や仲間にも悟られ難いからだ。

つまり二人は、禁断の恋を煩っていた。光と闇の立場同士が愛し

合うなど、決して赦されない。敵対する種族同士が惹かれ合うなど、言語道断だ。しかしそうとは解かっている、一度走り出した恋に、歯止めは利かない。

悪魔であるオセは、彼女から魔法陣で呼び出されるのに対して、仏教神であるカルラは彼から手の印で呼び出す形式になっている。

オセは腹式呼吸で息を整えると、一気に印を結びながらカルラ召喚の呪文——真言^{マントラ}を唱えた。

「オン・ガロダヤ・ソワカ、オン・キシバ・ソワカ」

すると大きな粒をした雫が落ちてきて、床で弾けたかと思うと同時にそこから突然、紅蓮の炎が渦巻くようにして立ち昇った。そして眩い閃光を放つと共に、一気にそれまでカプセルの様に渦巻いていた火炎が霧散し、中から大きな翡翠色の翼を背にしたカルラが現れた。

彼女は目前にいる相手を確認してから、大きな翼を持ち上げると体軀を仰け反らせ、顎を突き上げ上を仰いだ。

するとその翼がまるで骨を砕き、肉にめり込む様な音を立てながら背中に収納される。そして大きな息を吐くと、ゆっくりと顔を正面に戻しながら色っぽい声で囁きかけてきた。

「オセ。逢いたかったわ——」

カルラの黄金の瞳が、真っ直ぐ彼を見据える頃には颯爽とオセは動き出して、彼女の言葉が終わりきらない内にすっかりカルラの華奢な体は、オセの腕の中にあつた。

「オ、オセ？」

戸惑い尋ねるカルラに、体を離れたオセがその愛らしい唇に人差し指をサツと当てて、シィーツと齒の隙間から息を漏らす。恰も言葉は要らないとでも、言うかの様に。

オセが今回何を求めているかに気付くのは、その行為だけで充分だった。まるで当たり前かの様に、唇を重ね合わせる二人。

熱く、濃厚的で艶かしい口付けは自ずと欲望に突き動かされる如く、互いに次の段階に進まんとばかり激しく体を求め合う。

しかしそんな二人の愛欲に、突如水をさす者が現れた。

視得ない力で一気に二人は引き離されたかと思うと、それぞれ逆側の壁にお互い別々に叩き付けられ、礫にされるが如く強烈な力に押し付けられる。

いつしか室内は、暴風雨と雷や閃光の嵐になっていて天と地から轟くばかりの別々の声が重なり、二人に向けられた。

『相反する立場である上に、よもや宗派まで異なる者同士が色恋に堕ちるとは、問答無用の大罪と知つての事か。うぬ等を今この瞬間から、決して結ばれぬ様呪いを与えたもう』

直後、カルラの悲鳴が上がる。

室内で荒れ狂う嵐の中、必死に目を凝らして彼女を確認しようとするが、なかなか見付けられない。

「——ルラ……ッ！ カルラアアアアアアー！！」

力の限り、オセは彼女の名を叫ぶ。途端、嘘の様にピタリと嵐が止んだ。同時に、それまで壁に礫にされていたオセの体が床に落下する。

真っ先に彼のオッドアイの双眸に飛び込んできたのは、翡翠色をした一羽の大鷹だった。それがカルラである事は、すぐに分かった。激昂の余り、強く食い縛ったオセの下唇から鮮血が赤い筋を作り、床に滴り落ちる。

「我が主バアルを怨み、カルラの主ヴィシユヌを憎む。キリストの神が唱えた、“隣人をも等しく愛せ”の言葉を知ら示してやる！」

こうして昼間はカルラは神鳥ガルダの姿に、夜はオセが魔獣の姿となり共に同じ人の姿で過ごせぬ呪いを、かけられる事となった。

その呪いを解く為には、キリストが地上に残した聖餐杯が必要だった。

気付けばすっかり日没し赤き豹に姿を変えたオセは、人の姿に戻ったカルラを背に乗せて、夜の闇を駆け出した——。

？：交われぬ愛（後書き）

カルラの前身、ガルダは驚だと言う細かいツツコミはナッシングの方向で。

大鷹にしたのは、女性イコール見栄えの良さから当作品ではその様に設定しています。

オセの能力設定も変更されているので、細かい事は抜き！！ww。

最後に、セリフはあるけど会話はしていないので、禁止事項に触れていない事も伝えておきます（苦笑）。

？：不滅なる聖餐杯との契約（前書き）

* テーマ…………不安

- ・ 禁止事項？………… 名前の記載禁止
- ・ 禁止事項？………… !と?の使用禁止
- ・ 禁止事項？………… 会話文の使用禁止

？：不滅なる聖餐杯との契約

聖杯というと、有名なのが神の子とされる人物が最後の晩餐で、己の血と見立てて葡萄酒を注いだ杯。

そしてまた、彼が磔刑になった際その死を確認する為に、兵士がロンギヌスの槍で突いた事で流れ出した、その鮮血を注がれた杯として、存在に関する話題は拡散し曖昧にさせている、聖遺物だ。それでも揺ぎ無い、確固たる存在とされている聖杯。余りにもこちらの情報が有名過ぎて、知られてはいないがこの聖餐杯には対なる杯が存在する。

それは、『ユダの杯』。又の名を、『裏切りの杯』。

今でこそ彼は神として崇め祀られ、一方は悪として蔑まされている。

だが、二人は一番身近な存在であり、対照的な性格の持ち主だったからこそ、互いに足りないものを埋め合える、一番の親友でもあった。

故に、十二人の使徒の中でも一番特別扱いされていて、誰よりも真理を授かっていた。その関係はもう、主従の間柄を超えていた。

神の存在を信じ続け、それを証明する為に彼は自らを“ユダヤの王”、それでいて“神の子”だと顕示した。

これを当時、偽証罪で神を冒瀆する冤罪として、周囲のローマ人達を激怒させる。

一方、その親友は誇示的な彼を全力で守りたくて、一つの賭けに出た。

その行為は今でこそ、裏切りとして名を轟かせているがこれは友から、彼に向けての最後の忠告だった。

——神などこの世にいないんだ——

それを証明する為に。

漠然とした曖昧でしかない、不安定な存在の神と言うものからその使徒は彼に気付かせ、救おうとしたのだ。このままでは、身を滅ぼしかねない彼を。

その事を彼は知っていた。気付いていたと言っべきか。真の友だからこそ分かり合える、相手の思惑。行動。顔を見れば何を考えているのか、分かる事は皆にもあるだろう。

鶏が三度鳴くまでに、自分を役人に突き出すだろうと。

彼が使徒である親友に告げた言葉だったが、それは二人の仲だからこそ知り得た、相手の行動力。

自分を神の幻影から救出したいと切願する余り、その神たる存在を自分の中から抹消せんとして、己の目を覚めさせる為に役人もしくはローマ兵を、利用するだろうと。

これは最後のお互い二人が親友として向かい合った、それぞれの賭けだったのだ。

神はいる。いざとなればこの御子である自分を、救出する為に姿を現す。

不安定でしかない存在の為に、命の危険を晒してからでは遅過ぎる。

……結果。

神は御子と主張する彼を救出するどころか、姿も見せなかった。

賭けは、彼の負けだったが、親友はこの危険な賭けで勝っても全く嬉しくなどなかった。

彼が最後の死する瞬間に残した叫びは、親友の耳から脳に刻まれて離れない。

初めて彼が神の存在に裏切られた、強烈な意味を込めた言葉。

父よ。何故貴方は息子の私を見捨てるのですかと、叫喚しながら

絶望のままに死んでいった彼。

ただ友を守りたかった。

それだけの理由だった。

金など欲しくもなかった。

その手の中にある30枚の銀貨は、役人が勝手に懸賞金だと押し付けた物だ。

神の無を証明した代わりに、それを伝えるべき大切な親友を失ったのだ。

相反する程仲が良い事もある。磔刑で相手を亡くした彼は、貰った銀貨を川へ投げ捨てると絶望の余り、絞首自殺を図った。

裏切りとは何か。

使徒の裏切りは、そこで彼の為に生き延びようとせず自殺して、自ら命を絶った事こそが、真の裏切りになったともされている――。

――今目前にあるのは、その当時使用された聖餐杯だ。

神はいないと唱え続けた彼も、皮肉ながらそれに近い存在として蔑まれるようになった。聖と邪。善と悪。神と魔。

その杯の前には、その称号を持つ種族の男女が佇んでいる。正確には、一人と一匹と言うべきだろうか。

だがその杯は、嘗ての御子の物でもなければ裏切り者の物でもない。

自殺する前の彼が、それぞれの杯を真つ二つにして片方ずつを、併せ直した代物だった。

それを“不滅なる聖餐杯”と命名して、彼は首を吊って死んだ。つまり、聖と邪の両方が契約できる杯。

真珠色の髪をした女と赤毛の豹は、その杯に数滴ずつ己の血を滴らせる。互いの血が杯の中で交わる。

その様子を不安そうに見守る女。彼女は、十字架と吊り輪のロー

ブが垂れ下がっている間に挟まれる様にして、三段の石碑の上に恐る恐る置いた。

少し待つと、夜が明けて太陽の光が杯に差し込む。するとその中のそれぞれの血が、杯の底に染み込んだかと思うとそのまま吸収された。

夜が明けたので女は翡翠色の大鷹に、赤毛の豹は黒髪でオッドアイの男に姿が変わっていた。

こうして聖餐杯との契約を交わすと、それを男が手に取った。後に、二人が昼夜問わず導き来る客から、代価をその杯に契約させてゆく事になる。この杯が並々一杯となり、溢れ出すまで。

その“不滅なる聖餐杯”と同等の価値になるまでの、契約物をその度に注ぎ込む。

それが一体どれくらい必要なのか。いつまでそうせねばならないのかは、二人にも分からない。

複雑な不安を胸中に、男は朝日に向けてその杯を、掲げて見せた……。

【El contrator
concocting immortal】

？・不滅なる聖餐杯との契約（後書き）

この手の話は、名前記載でなければ知らない人は、意味不明だね
（汗。

？…99%のネタと1%の実行（前書き）

テーマ……歓喜。

禁止事項……心理描写禁止。

？：99%のネタと1%の実行

満杯の来場客を前にした舞台に、二人の男が立っていた。

「なあ、この歌知ってる？」

そう訊ねた男は、何故か人形を抱いている原竹だった。

「うん？　どんな？」

そう逆に訊ねた男は、普通に何も持たない上枝だった。

「何でも喜ばしい時とかに、よく歌われるらしいんだけどな」

「日本語？」

「いや、多分英語」

「あー！　残念。俺英語苦手だし、洋楽も好きじゃないから恐らく知らねーわ」

そう答えた上枝に、オーバーなまでに原竹はリアクションした。

「ええ！　知らないの！？　こんな有名な歌を！」

「こんなつてどんなだよ。歌ってみる。そしたらひよつとすれば俺も知ってるかもしれないからさ」

「えー？　歌うの？　お前なんかの為に？　勿体ない」

原竹が流れに逆らうのを、上枝が滞りなく言い放った。

「じゃあ何だ！　今までの前振りは何だったんだ！　歌って聞かせる気がねえなら、今の部分要らなくね！？」

それに対して原竹は目を瞬かせるや、すっ呆けた様に真面目な口調で答える。

「いや、いるよ。だって歌う気だったから」

「結局歌うならいいじゃねえか別に！　そんなさつきみたいに嫌がらなくてもよ！」

喚き散らす上枝に、原竹は煩わしそうに受け流す。

「分ーかったから！　そんな耳元でアンアン喘ぐな」

「誰が喘ぐか。それを言うならキャンキャン騒ぐなだろ。お前には

俺の不服申し立てがエロく聞こえたのか」

「じゃあ歌います」

「無視かよ！」

そうして上枝のツツコミをスルーして、原竹は改まって咽喉を慣らし背過ぎを伸ばした。

「ハーゲるや！ 禿げるや、禿げるや、禿ーげるや、禿げえゝるやあゝ」

「それ“ハレルヤ”じゃねえか！ 何自分が禿げたからって有名な宗教音楽を歪曲してんだ！」

そう喚くと上枝は容赦ないツツコミを入れる為に、原竹のスキンヘッドに平手を振り下ろした。

バチイーン！

「——うわ！ 何だこれ！ お前このツルツパゲ頭に何か塗ったか！？ 手が貼り付いたぞオイ！」

上枝は彼のスキンヘッドに貼り付いた自分の掌を剥がす為に、原竹の肩を支点にして彼を突き飛ばす形でその頭から手を離す。そんな彼に、原竹は客席の様子を伺う。

「いいでしょ、これ。笑いが滑らない様に頭に塗った、滑り止め剤」
「いや、ちつとも良くねえよ！ どうせ頭に塗るなら育毛剤を塗れ！」

二人の遣り取りに、会場の客から一斉にドツと笑いが沸く。そんな客の反応を後目に、原竹は続けた。

「せっかくこつちの人形に俺の断髪したのを植毛したんだから、ツツコムならこの人形の頭にしてよ」

「そういう問題か！？ 自分にじゃなくて人形に植毛って、そこんとこどうよ！？」

すると抱えている人形の髪を撫でながら、突如原竹は語りだした。
「だつてさゝ。俺、生涯禿げ頭になるのを代価にして、いつも客の笑いを取れる様に契約したから、その前に形見としてこの人形にまだフサフサだった髪を切つて、植毛したからさ」

そんな彼に、上枝は一瞬絶句してから、裏返った声を張り上げる。
「ハア！？ ケーヤク！？ お前野球のドラフトじゃねえんだぞ？
このお笑い業界！ で？ どの誰と契約したんだよ」

「それが分からないんだよ。たまたま夜通りかかった道にあった、
便利屋の店に美人なネエちゃんがいてさあ。どんな願いでも叶えま
すって言うから、さっき言った様に頼んだら叶っちゃったんだ。け
ど昼間になってもう一度確認したくて、その店を探してもどこだっ
たか分からなくて見つけれなくてよお。何せベロベロに酔ってた
し」

言つと原竹は、舌を出してベロベロして見せる。

「汚えから！ つか、いきなりアドリブ入れるなよ！ 何だその話
今ここで初めて聞いたぞ俺！ だからか！？ 一週間前からいきな
りスキンヘッドになったのは！」

上枝は彼の突然のアドリブに、必死に舞台を進行させようとして
いる。そんな彼の様子を他所に、原竹は首肯した。

「うん。でも後で気付いてさ。“しまった。ツルツパゲにしたら、
ツツコミ担当のお前が俺の頭をはいた時、ツルリと滑ってしまっ
”って。そこで慌ててさっき楽屋で頭に滑り止めクリームを――」

「だから根本的に、そこが間違ってるって言ってたんだよ！」
バシイー！

そうして上枝が振り下ろしたツツコミの手は、咄嗟に原竹が頭上
に持ち上げた人形の頭にクリーンヒットした。

しかし悲しいかな、その勢いで人形の頭がポロリともげてしまっ
た。場内は喚声と爆笑の渦で大賑わいである。その度に、改めて便
利屋と契約した原竹は客の歡喜を全身の笑いで、手繰り上げていっ
た。

しかし、原竹がTVを通して大々的に便利屋の店を宣伝したとこ
ろで、常時店の場所が変わっているのですその効果も皆無である。

そんな事も露知らず、今日も原竹は相方の上枝と共に人気を博し、
鰻上りの売れっ子芸人として客からの歡喜は、尽きる事はなかった。

？：契約者のルール（前書き）

- ・禁則事項？……直喩法使用禁止
- ・禁則事項？……固有名詞使用禁止

【テーマ】光景

？：契約者のルール

年齢も40歳を超えたこの独身未婚女の趣味は、他人の私生活を双眼鏡で覗く事。

その女は夜、水商売の仕事をしていて毎日帰宅するのは、夜明け前だった。ベッドに入り眠る頃には、空も明るさを増している。

そんな今日も、女が住むマンションの十二階の窓から寝る前の恒例として、こんな遅い時間まで明かりの点いている窓を見つけては、その部屋を双眼鏡で覗いていた。

似た者同士、同じ水商売をしているものばかりが何故か集中している。それに当て嵌まる言葉もあるが。

この界限には、そういったアンダーワールドの職業を主とする人間ばかりが住んでいるので、人間鑑賞には事欠かない。

同棲している女性にホテルやピンサロをやらせて、彼女がまさに体を張って稼いできた金を、巻き上げる外道男。

旦那に捨てられ女一人で子育てしている母親は、仕事で受けたストレスを託児所から連れ帰った、まだあどけない我が幼子おさなこに虐待で発散する。

また寝る前の運動にとSEXに耽るカップル。女同士だったり、男同士だったり。探せばいくらでも目に入る、この世の汚物共。それはまさに、覗き見している女にとっては、絶景だった。

そうして満足したところで、風呂に入って眠る為に双眼鏡を引き上げようとした、その時。一瞬双眼鏡の端に、不自然なものが映り込んだ。改めてそちらへ双眼鏡を向け直し、ピントを合わせる。

するとそこには、この世の生き物としては見た事も聞いた事もない、真紅の色をした豹。そのすぐ隣には、真珠色の髪をした女が立っていた。

二十階建てマンションの屋上で、巨大なお酒の看板を背後に夜明け前の街を、見下ろしている。看板を照らすライトがなかったら、そんなところに不自然な一人と一匹がいた事に、気付きもしなかっただろう。

遠くの紺碧色をした空と、薄汚れた空気を纏った街の境界線から朝日が射し、空の色を朱に染める。その瞬間、女は信じられない光景を目にした。

日を浴びて豹は赤毛を更に濃い深紅に眩く反射し、一緒にいた女の真珠色の髪も煌びやかに輝いたかと思った時には、互いの立場が逆転していた。

いや。正確には状況は似ているが、姿が違う。

赤毛の豹は黒髪の男に変化し、真珠色の髪をした女は翡翠色をした、美しい大鷹に変化していたのだ。

——これは面白いわ！

覗き見の女は恐れる事無く、寧ろ喜んで口角を上げると、不自然な笑いを漏らした。無意識から、それは引き攣って聞こえる。しかし突然、双眼鏡は真っ暗になり、何も見えなくなった。

驚いて女が顔を上げた時、目前に飛び込んだのは左右色違いの双眸。更に一歩後退って全体の焦点を合わせると、そこにいるのが誰なのかすぐに分かった。

肩に止まる翡翠色の大鷹。黒い髪をショートにした、紫と青緑の目をした男。明らかに異様だが、それ以上にこの十二階の高さがある窓辺に、今いたマンションの屋上から飛び移って来た方が、驚異だ。

「あんだ達、何者なの！？」

「……——便利屋の、店主をしている者」

男は胸に片手を当てて、軽くお辞儀をするが視線は足元に落としただけだ。

「人間じゃないでしょう!？」

「勿論お嬢さん。貴女がご覧になられた通り、我々は人間と異なる者。貴女のご希望は？　どんな願いでも何でも叶えて、差し上げますよ」

自分より若いであろう美しい顔の男に、“お嬢さん”と呼ばれて悪い気はしなかった。

「天の御使い？　悪なる魔物？　少なくとも化け物なのは確かね」
女は両腕を組み、視線を上下させながら彼の前を行き来する。その女の動きに、彼の肩に止まっている翡翠色の大鷹が頭を動かし、後を追う。

「人間の味方だと、思って頂きたい」

「じゃあ何？　この世を手に入れたと言ったら、それも叶えられるわけ？」

まさに立場を優位にし、すっかり女は上から目線である。

「貴女様がそう望めば」

相変わらず男は、胸に片手を当てお辞儀をした姿勢のままだ。

「クスクス。面白いわ。じゃあ私を女王にしてよ！　そして何人もの男をはべらせるの。女どもは、かしくかせてね！　この世に君臨する女王よ！」

「それで宜しいのですね？」

「そうよ！」

「では、契約——成立」

男はそれまで下げていた頭を上げるや、胸元に当てていた片手を差し伸べて女の前で、グツと握り締めた。

その後に、ふと店主の男は思い出した顔をして、呟いた。

「まずい。彼女に代価の説明をするのを忘れていた。ま、いいか」
そうして空に飛び立つ大鷹になった、真珠髪の彼女と一緒に男は空気の層を蹴り宙を滑空して、その場を後にした。

女は正気を失っていた。

しかしそれも気付かずに女は、自分は最高の地位からの素晴らしい光景に酔い痴れていた。女の見るもの全てが、女の思い通りの世界だったがそれは、便利屋の男の得意呪術である“幻覚”でしかなかった。

周囲の誰もが、この女を狂人扱いにした。

ただの人間風情が、“彼等”の正体を見知り詮索しては、決していけない……。――。

？：契約者のルール（後書き）

×切時刻に間に合わず、大慌てで校正見直し一切なしに投稿したので、見苦しい点が多くあるかと思っています。
その時はスルーせずに教えてください（汗）。

？：月の砂漠（前書き）

・禁則事項？……擬態法使用禁止

・禁則事項？……擬人法（偽物表現も含む）使用禁止

・テーマ……砂漠

?:月の砂漠

時は満ちた。

オセが今しがた入手した、人間の願望を聖餐杯に注ぎ込んだ瞬間、それは眩いばかりの光を放った。

彼の肩に乗っていた翡翠色した大鷹の姿をしたカルラも、オセと共にその光に呑み込まれた……。

気付くと二人は、何もない荒涼とした場所にいた。

「――砂漠……？」

そう先に言葉を口にしたカルラの声に、オセは我を疑った。

どちらか一方が鳥獣である呪いを受けているはずの二人が、人の姿で相まみえていたのだから。しかし、すぐにそれが本体ではない事に気付く。

アストラル
それは幽星体であり、透けているが触れる事の出来る霊的肉体の事だ。

アストラル
二人の幽星体がいる場所は、紛れもない砂漠だったが、地球のものとは明らかに異なっていた。今二人がいる場所はとても寒く、そこから青く輝く地球が見て取れたからだ。

「ここは――」

「ここは、地球と対なる天体、衛星、月」

オセの言葉と重なるようにして聞こえた別の声に、二人は驚愕しながら振り返る。その軽やかに澄み切った声主は、純白の翼を背にした一人の女だった。

その女――天使と呼ぶべきか――が胸元の中央で翳している両手の間には、宙に浮くようにして聖餐杯が存在している。

「私の名はガブリエル。四大天使の一人にして、この聖餐杯を守護

する者」

「どうして私達は、こんな姿でここに？」

早速相手に口火を切ったのは、カルラの方だった。

「それはあなた方がそれぞれの主から、肉体に強烈な呪いをかけられている為、^{アストラル}幽星体のみを私が支配するこの月に呼び出したのです。

正確には、この杯の中身が一杯になった所で守護者である私が、あなた方に呼び出されたと言うべきでしょう。ご覧の様に月面は、何も無い砂漠。私が支配している以上、何者にも邪魔はされません」

「我々は互いの主、バアルとヴィシヌによって同じ姿で時を過ごせない、呪いを受けた」

「存じております。ソロモン七十二柱の魔神の一柱、序列五十七番の地獄の大総裁オセ。ヒンドゥー教守護神天竜八部衆もしくは二十八部衆の一、カルラ。それぞれ宗派も立場も異なりながら、恋に落ちた存在。故にこの聖餐杯に縋ったのでしょう」

「我々は元の姿に戻りたいのだ！」

感情的なオセを前にしながらも、穏和に落ち着き払っているガブリエル。

「それは、ソロモン七十二柱の魔神として？ それとも互いに愛し合える人の姿として？」

柔軟な口調のガブリエルからの問いに、オセの言葉が詰まる。そんな彼に、ガブリエルは続ける。

「この聖餐杯の本性を、ご存知でしょう。我が主神の御子と、その弟子ユダ、二人の杯が相合わさったもの。つまりこの杯は、犠牲と背徳の象徴なのです。この杯と最後に契約するのは、今現在の持ち主であるあなた方。各々の愛を犠牲にして本来の立場に帰依するか、もしくは主を裏切り互いが望む愛を取るか」

「二者択一と言う訳か」

そう忌々しげに吐き捨てるオセの横顔を、瞬きもせずに見詰めるカルラ。

「私は、あなたを取るわオセ。その為に呪いを受け続けたのだから。

もしこの恋を犠牲にするのなら、今頃とつくに天に帰り、あなたと一緒にいはしない」

「カルラ……」

オセは彼女の頬に手を当てると、優しく口づけを交わす。

「——俺も同じ気持ちだ」

そんな二人を温かく見守っていたガブリエルは、二人の意見に静かに声を発する。

「では、主への裏切りとして、互いの愛を貫くのですね」

二人は抱き合ったままガブリエルを見詰めると、無言のまま一緒に首肯する。

「さすれば墮落追放となり、あなた方はその立場を失い、ただの人となりますよ。それでも構わないのですね？」

それに再び、同じ様に二人は首肯する。

「その愛の先には、あなた方が経験した事のない死が待ち受けていようとも？」

「当然だ。いずれ朽ち果てるのが、人間と言う生き物だ。それでも俺は、そんな人間を今ほど羨ましく、思う事はない」

オセの落ち着き払った威信ある答えに、ガブリエルは一層柔和で優しい微笑を湛えた。

「では望みなさい。この聖杯に。代価として各々の立場を捧げるのです」

ガブリエルはそうして杯を二人の前に差し出した。二人は共に杯に、手を翳す。

「望もう」

「私も共に、望みます」

すると二人の掌から、霧状のエネルギーが流れ出し、杯に注ぎ込まれた。

「契約は交わされました。ではこの杯の中身である、聖水を互いに飲み交わしなさい。次に目覚める時、その望みは果たされている事でしょう」

ガブリエルの口調は、何者をも穏やかにし不安感をも取り除くほどの、安らぎがあった。そっと丁寧に杯を、オセに手渡す。

オセは杯を受け取ると、言われるがままカルラと共に中身を半々ずつ、飲み干した。

すると、それまで契約してきた者達の喜怒哀楽が一気に二人の幽^{アス}星体^{トラル}を貫くように、駆け巡った。二人はそれに苦痛し悶絶しながら、共に手を取り合うとまるで息絶えるかの如く、気を失った。

「この愛し合う二人に、幸あらん事を」

ガブリエルは優しく囁くと、その背にある純白の翼を大きく広げた。

？：月の砂漠（後書き）

今回のテーマ「砂漠」が希薄なのは重々承知していますが、これが精一杯でした： illorziilli

もう一つ、尤もらしい作品を書いてそっちの方がテーマに忠実でしたが、勿体なくて（文字数制限内で収めるのが）、次の新企画向けに回させてもらいました。

何はともあれ、今回のお粗末さは自覚の上です。

ここまで拙作を読んで頂いて感謝とお詫びを申し上げます<（

ー）>

t h e f i n a l :そして行方は(前書き)

・禁則事項……手抜き禁止

・テーマ……幸福

t h e f i n a l : そして行方は

——十四年後——

「オセ！ オセ！」

階下から母親に呼ばれて、一人の少年が煩わしそうに下りてくる。
「何」

ぶつきら棒に返事する、黒髪の少年。そんな息子へ振り返る事無く、母親はキッチンで機敏な動きをしながら、話しかける。

「昨日お母さん、話したでしょ。ほら、夕食の時に。お隣さんが引っ越して来たって話。それでパイを焼いたのよ。持ってつてくれない？」

「母さんが持つてけばいいだろう」

数段上の階段から、手すりに両腕を置いて面倒そうに少年はぼやく。

「お母さん、昨日挨拶してるのよ。その時にね、あなたと同じ年頃の娘さんがいたの。大人しくて礼儀のいい、上品なとても綺麗な子よ」

「ふーん。でもこんな俺が行ったら、返って怯えるかも知れないじゃないか。何せ初めて顔合わせるんだし」

「それがね、オセニアス。その娘さんもあなたと同じらしいのよ。だから同じ症状を持つあなたに頼むのよ。オセ」

「……」

オセニアスと呼ばれた少年は、それを聞いて興味を抱いたらしく、完全に階段から下りるとキッチンに歩み寄る。

「じゃあ、これ。……優しく声をかけてあげてね」

母親は、アルミホイルを被せてあるレンジ用の皿を入れたバスケット

ツトを手渡すと、言い聞かせるように笑顔で息子の双眸を見詰めた。バスケットを受け取った彼は、外に出ると表の庭を抜け、柵の扉を開ける。

そして住宅地を通る道路の歩道を、左手の隣家に向けて歩き出す。歩道と車道を隔てる街路樹は、葉っぱが色づき秋の気配を醸し出していた。

数歩も歩けば辿り着く隣家には、敷地を囲う柵はなく青々と敷き詰められた芝生に、玄関に向けて煉瓦造りの小道が一本。それに沿って玄関に向かうと、呼び鈴を押した。

暫く待つと、二重になっているドアの奥の扉がゆっくりと開き、一人の少女がそつと顔を覗かせた。しかし一瞥しただけで、すぐに伏せ目がちになる視線。そんな彼女の顔を見ただけで、オセニアスはずぐに心境が読み取れる気がした。

自分も今まで周囲に同じ扱いを受けてきただけに、彼女を怖気させないよう柔和な口調で声をかける。

「やあ、あの。隣に住んでるんだけど、これ。母さんがここに持ってきてって」

「……なあに？」

か細く発せられたその声は、鳥の鳴き声の様に心地よく感じた。いつもは素っ気無い性格の彼だったが、今回は不思議と自然な振る舞いが出来た。本来は無愛想な顔に、ぎこちないながらも笑顔が浮かぶ。

「パイだよ。俺の母さんが焼いた。凄く美味いんだ。だからその、良かったら君も」

彼女は少し、戸惑っているようだったが受け取らない訳にもいかない。恐る恐る外に出てくる。その姿に改めて彼は息を呑んだ。透き通るように白い肌。真珠色した美しいミディアムロングの髪。何よりも、髪と肌の色とは一際目立って引き付けられる、黄金の瞳。住宅のドアの外にもう一つあるストームドアを開けると、少年の手からぎこちなさそうにバスケットを受け取る少女。

「ありがと。頂くわ」

「ほら。俺の目を見て」

直後に、彼は二本指を自分の目に指し示しながら、少女に言った。その言葉に怪訝そうな表情で、言われたとおり洪々視線を上げた少女は、そこで初めて気付いたように驚愕の表情を見せる。

少年、オセニアスの双眸は、青緑と紫のオッドアイだった。

「君、アルビノなんだろう？ 俺の片目もさ、その影響を受けてるんだ。一緒だ」

「……ホントね。私以外にアルビノの人に会ったのは、あなたが初めてよ」

アルビノとは、生まれつきメラニンの欠乏により体毛や皮膚は白く、劣性遺伝や突然変異によって発生する。代表として有名なのは白ウサギだ。

この場合、耳のてっぺんから足の爪先までその影響を受けている為、虹彩も無色半透明となり眼底の血液の色が透け、赤眼になる。

しかしオセニアスの場合は、片目の虹彩に少しだけその影響を受けて、本来の碧眼の色素と血液の色が混合されて、紫色になっていた。以って彼女の場合は、どうやら全身の色素がないらしい。

アルビノの目の色は幾つかに分かれていて、無色・淡青色・淡褐色などがある。無色半透明は赤眼。淡青色半透明が紫眼。

そして彼女の場合は淡褐色になるのだが、本来の琥珀色アンバーの名残と全身の白さから目立って、光の度合いで黄金色に見せていた。

彼は改めて、自己紹介をする。

「俺、オセって言うんだ。オセニアス」

すると彼女も少しはにかみながら、自己紹介で返す。

「私はカルレシアよ」

「カルレシア、愛称は？」

「……カルラ」

「素敵だな。カルラ。よろしく。仲良くしよう」

一見口説き文句に聞こえるオセニアスの言葉に、戸惑い恥じらい

を見せる彼女に、オセニアスは慌てて付け加える。

「ああ、勿論、隣人同士として」

するとカルレシアが、突然クスクス笑い出した。

「ごめんなさい。でも、なぜだかあなたとは初めて会った気がしないわ。ひょっとして、あの子のせいかしら」

「え？」

すると足元を何かがすり抜けたような感触に、ふと見下ろすとそこには少年と同じ色のオッドアイをした赤虎毛の猫が、散歩から帰宅したところだった。

ニヤンと鳴いて、そのまま室内に入ってゆく。

「偶然にも、あの子の名前もオセなの。私が名付けたのよ」

「そいつはいい。ネーミングセンスがいいね」

「あなたのお母様もね」

そうしてふと見詰め合うと、弾けた様に二人して愉快気に笑い出した。恰も、ずっと前から知り合いだったように。

「パイ、ありがとうと伝えて。今度うちから、マフィンを持ってい
くわ」

「マフィン？ 君の手作り？」

「そうした方が？」

「君の手作りを食べられるなら」

「OK。そうするわ」

会話も尽きたところで、少し名残惜しさが胸に去来する。オセニアスは手持ち無沙汰になった両手をブラブラさせてから、前方でそれを捉えて組み合わせると言った。

「それじゃあ、また、その時に」

数歩下がって片手を上げる。それに応えてカルレシアも片手を上げて指を動かす。

「ええ。じゃあ、またね。……オセ」

「ああ。——カルラ」

二人は心の底で芽生えた、まだ小さな淡い膨らみに密かな期待を

寄せながら、一旦その場で別れた。

惹かれ合う若いときめき。生まれながらに繋がっている赤い糸。
激しい炎の熱を帯び、運命の元に出会わなくては出会った、誓い
交わされし秘めた約束。

それが絡み合うのは、そう遠くない未来。

【El contrato con un c?lizz inmo
rtal】——end——

t h e f i n a l :そして行方は(後書き)

『創作五枚会』企画終了に合わせて、本作もこれにて完結致します。

今までお付き合くださった方々に、深い感謝を。

そして企画参加者の皆様、大変お疲れ様でした！

企画を通して、いくつもの欠点に気付かされそしてまた、たくさん知識を得られたと思います。

まだまだ未熟さは拭えませんが、日々精進の意味でも素敵な体験をさせていただき、企画発案者の無言ダンテさんに、改めて心よりお礼申し上げます。本当に素晴らしい勉強になりました。

読者並びに参加者様、本当に有り難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580o/>

Ψ不滅なる聖餐杯との契約Ψ

2011年3月19日20時10分発行